

裔の子



多田尋子



裔^{すえ}の子
多田尋子

裔の子(すえのこ)

一九八九年九月一日 第一刷印刷
一九八九年九月一日 第一刷発行

著者 多田尋子

発行者 福武總一郎

発行所 株式会社 福武書店

東京都千代田区九段南一―三―一八
〒(三三)電話(〇三)二三〇一二三二
振替口座(東京)六一〇五〇九七

本文印刷 大日本印刷

平版印刷 栗田印刷

製本所 小泉製本

(落・乱丁本はお取替え致します)
(定価はカバーに表示してあります)

多田尋子(ただ ひろこ)

一九三二年、長崎県に生まれる。
日本女子大学国文科卒業。「白い部
屋」が第九六回、「单身者たち」が
第一〇〇回、「裔の子」が第一〇一
回の芥川候補作となる。

裔の子
目次

風

183

夢の
巢

155

殯
笛

113

裔
の
子

7

装 装
画 幀
小 菊
山 地
進 信
義

裔の子

裔の子

やはり、雨は降っていた。たくさん降るのではないが、降っているのかいないのかわからないほどの雨が降りつづいている。もう一週間もこんな具合だったような気がする。先週の日曜日もこんなふうだった。雨が降っていると、墓まいりの人たちはこない。墓まいりの人がこなければ沢子の店にも客はこない。墓まいりの人たちは細い道をはさんだ向いにある寺の広い石段をのぼる前に、花を買ったり関枷桶や箒や植木

鉢を借りたりするため、沢子の店に寄っていくのだ。壁いっぱいにつけてある棚の上の方の段の閑伽桶は、墨で大きくいろいろな名前が書いてある。下の方の桶には何も書いてないが、桶の底には沢子の家の名前の焼印が押してある。名前の書いてある桶はそれぞれの家で買いつつたものを預かっているのだが、下の棚の桶は、自分の家の桶を持っていない人たちに貸し出すものだ。店の土間には線香や燐寸や蠟燭や作業手袋やわら帽子や饅頭や果物やそれから売りものの箒や植木鉢も置いてあった。土間の中央に細長い机がありその両側に同じ長さの床几が一つずつ置いてある。店に寄った客にお茶を出し、注文があれば饅頭やジュースも出した。暑くなればかき氷、寒くなれば甘酒も出した。今は十月でどちらも用意してない。日曜日はまいる人がいつもの日より多いので、花や饅頭や果物などは多めに仕入れておく。しかしこの天気では今日もきつと売れないだろう。先週の日曜日にもほとんど売れ残って、母をいらだたせた。今朝はもう起きたときから、母は暗い顔をして溜息をつきぐずぐずと愚痴りつづけている。だからわたしは昨日そういったのに、仕入れは少なくしようといったのに、おまえが明日は晴れるよきつとなんていうからこんなことにまたなって、この店

はもうやっていけなくなるよきつと、きつとそうなるよ。母は聞えないほどの声で同じようなことをいいつつけながら土間を掃いたり畳の部屋にさがってただ歩きまわったりしている。掃き寄せたごみをちり取りに受けている母の左手首の内側に見えたりかくれたりしているケロイドになった二センチぐらいの傷あとから目をそらせて、そういう母の愚痴や引きずるような足音を聞きながら、畳の部屋の端についている上框に腰をかけ、沢子はさっきからずっと、雨にぬれて苔の緑が浮きだしている寺の石段を見つづけていた。そういつたって、もしわたしが明日も雨が降るよとでもいったらおかあさんは昨日から癪をたててしまうじゃないか、と思っていた。晴れようが晴れまいが、晴れるというしかないのだった。母はそれを沢子にいわせようとして何回でもきいているのだから。「どうかしらね。どう思う？ 沢子」「わからないよ」「でもさ、晴れっこないよねえ、こんな雨だものね。やっぱり半分にしとこうか？ いっそもも仕入れないどころか？ ね、そうしようか」「知らないよ、いのようにすれば？」「そうれ、沢子はすぐそうだ。わたしの心配なんか少しもわかってやしない。こんなに氣をもんでるのに何といいいかただろう。でもそういうものかもしれないね、も

うあんたはうちの人間じゃなくなるんだものね、うちなんかどうなったって……」とすぐ泣き声になるのだ。そういう声を聞くと沢子は体が熱くなり、なんでもいいから母のこの粘りつくような陰気な声を聞きたくないと思う。だからいつも、母がのぞんでいる言葉をいつてしまうのだ。「晴れるよ、きつと」と、ほんとうにどうでもいいという感じでわざといても、「そう、そうね、そうだよね」と母はさすがのようにうなずき、何回もくり返してつぶやくのだ。

しかし沢子がどう返事したところで、この雨がそう簡単にやむはずはなかった。今日雨が降っているのは、母にとっても沢子にとってもあたりまえのことだった。だから余計母はいらだって、さっきからぶつぶついいどおしなのだ。そのうちに、母が歩きまわっている部屋のもう一つ奥の部屋にいる祖母が、母をなぐさめはじめるだろう。そうして祖母が加わると、母はなおさらいらだつ。祖母のなぐさめの言葉は、それまで母が気のついていなかったあたらしい不安の種まで見つけ出してやるようなところがあるからだ。母は自分の気づいた不安の種をなんとか都合のいい方に考えて逃げようと相手に否定を求めているのだが、祖母はいつも、「しょうがないだろう？

それぐらいですんだなんてめっけもんだよ。下手をすれば……」とまったく悪い予想をいうのだ。祖母は知らずにやっているのだろうかそれともわざとなのだろうかと思いつながら、沢子は、ほんとうの親子である祖母と母とを眺める。ほんとうの親子なのだから長い付き合いで互いの気性はわかつているはずなのに、子供の沢子でさえ母の気性はわかつているのに、どうして祖母はおおるようなことをいうのか。そしてまた母の方は、どうしてそういう祖母をまるで催促でもするようにそのまわりを動きまわるのか。離れていればいいのに。もしかすると二人はわざとやっているのではないか、沢子に見られていることで二人はむしろ張合いが出てくるのではないか、見ていてなんかやらなければいいのだと思いつながら、沢子はそういう二人から目はずすことができない。二人からは、沢子が心配して棒立ちになっているように見えることだろう。普通だったら誰かが心配していることに気がついたらやめようとするだろうに、二人は逆だった。わたしがいないときは陰気かもしれないけれども黙々とそれぞれのやりようで暮しているのではないか。わたしがいない方がおだやかな時間がすぎるのではないか。沢子の関心を得るために二人は必要以上に困ってみせたりして次第に大

袈裟になるのではないか。自分の方が相手よりずっとたいへんなのだと沢子に思わせたいばかりに。あと一と月もすれば沢子はこの家を出る。厚夫のアパートに移る。結婚するはずなのだ。しかし沢子の気持は浮きたたない。この天気のようにだ。降っているのかいないのかわからないほどの雨が絶え間なくつづくように、はつきりとしなない不安が胸に湧きつづけている。罪の意識のようなものもある。こんな家から逃げられてうれしと自分が思っている後ろめたさだ。厚夫と暮せるのがうれしくないわけでもないし結婚というものにあこがれていないわけでもないが、この家から出られることがいちばんうれしい。

沢子が向いの寺の保育園に勤めだしてから、一年半たっていた。厚夫もやはり向いの寺の檀家の息子で、まだ子供のころから家族に連れられて墓まいりにきていた。だからといって沢子と幼なじみというわけではなかった。顔は知っていたけれど、沢子の店に園枷桶を置いている檀家は沢山あるし借りていく人も大勢いるから、そのなかの一つの家族の一人の子供、という感じしかなかった。沢子の働く保育園には彼の姉の子がきていて、厚夫がときどきその甥を迎えにこさせられていた。厚夫が迎えにく